



蘭學事始
下

洋学文庫
文庫 8
C 223
2





蘭學事始下之卷

一此會業怠らすくて勤とりて中次第も同奥の人も
 相加り寄りつとて事なりて各志す所ありて一
 様ならず翁ハ一とひ彼國解剖の書を得直に実験
 して東西千古の差ひあるを知らしめ治療の
 实用をも立て世の醫家の業をも發明ある種をも
 存してかく一日もたかく此一部を月立つ様になく
 見度と志を起せし事也へ他は望む所もなく一日
 會して解するに其夜翻譯して草稿を立てそれ



57012

付きてハ其譯述の仕々を種々様々考へ直
 セル事四年の間草稿ハ十一度逆認々へて板下
 渡すやうになり遂に解體新書翻譯の業成就す
 り抑江戸にて此學を創業して腑分といひ古り
 去るを新に解體と譯名し且社中にて誰いふと
 く蘭學といへる新名を首唱し我東方閩州自然と
 通稱となるにも至れり是れ今時の大に隆盛と
 なるべき最初嚆矢なり今を以て考れハ是迄二百
 年來彼外科法ハ傳はり存れども直に彼醫書を
 譯するといふ事ハ絶てなかりし此時の創業不

可思議にも凡そ醫道の大經大本たる身體内景の
 書其新譯の起始となりしハ不用意を以て得る所
 小して實に天意とやいふへ
 一過き去りたるを顧るも未だ新書の卒業に至らざ
 るの前は斯の如く勉勵するに或る兩三年も過ぎ
 漸く其事跡も辨するやうなる小随ひ次第に
 蔗を啜ふ如くして其甘味を喰ひつき去れよて
 千古の誤も解け其筋とくくは辨へ得る事に至る
 の樂く會集の期日ハ前日より夜の明るを待兼
 児女子の祭り見よおくの心地せり扱都下ハ浮華

の風俗なれハ他の人も去れを聞傳へ雷同して社
 中へ入來りしものもありとり其時の人々を思ふ
 一遂るも遂さるも今ハ皆鬼録上の人のミ多し嶺
 春泰鳥山松圓といへる男をミハ頗る出精せし
 今ハ則ち亡く同僚淳庵をミも新書上木の後なり
 けれとも五十は満とすして世を早うせり其去る
 往來せし者よて今ハ生残りしハ翁よりハたる
 歳下の人々れとも私前の醫官桐山正哲よてなり
 又其頃此業の著実なるを知れるものハ格別とへ
 て知らざるものハ大に怪しと疑ふもの多かりき

扱集り來りたる者の内にも其業のたつとつから
 すそれと突き留めもなき面倒なる事也へ遂に精
 カ盡きたり又ハ今日の生計に逐る人ハ其しる
 し見へさるは倦と且ハ已を得ず中道よして廢す
 るといへる族も多かりき又ハ偶志厚かりし者も
 多病よして事ならず早世せしも數多ありたり最
 初より會合ありし桂川甫周君ハ天性穎敏逸群の
 才よてありし由へ彼文辭章句を領解し給ふ事も
 萬端人より早く未だ弱齡とハ申社中よても未頼
 母數苦しとて賞嘆したりき尤其家代ハ阿蘭陀流

外科の官醫なる上其父甫三君ハ青木先生より「ア
 べセ」二十五字をたゞめ僅なるらも蘭語なとも傳
 り給ひしを聞覺へ火しハ其下地もありし故まや
 退屈のやうすもなく會ふとまハ怠りなく出席し
 とまへり
 一同盟の人々毎會右の如く寄つとみし事かくあり
 といへども各其志す既異なる是れ實し人の通
 情なり先づ第一の盟主とする所の良澤ハ奇異の
 戈也へ此學を以て終身の業となく盡く彼言語
 通達し其力を以て西洋の事跡を知り彼書藉何

ても讀得ときの大望也へ其目的とする既康熙字
 典をこの如き「ワールデンブック」を解了せんといふ
 事深く意を用ひたりそれゆへ世間浮華の人
 多く交る事を厭ひたり此學開へき天助の一ツハ
 唱へ此頃よりハ常一閉戸を以て外へも出ず亦湯
 居れり其君昌康公ハ其素心の情合をよく知れし
 彼ハ元來異人なりとて深く好む給ふす然れども
 本務より怠りなかりけり勤方疎漫なり終業を
 へ告奉りし人あり又其業の勤めをなす終業を
 つとめ生民の有益なる事を為さんとすも取り
 天下後世の勤業を勤むるに任せ置けり
 也直其業を勤むるに任せ置けり
 拾はれし其業を勤むるに任せ置けり
 テしキ採りし其業を勤むるに任せ置けり

章押し給ひて興へ給ひし事もあり元未其節を樂
 山と君侯より賜り物なりと御戯れハ君侯常々良
 昔ハ阿蘭陀人の化を去り御事出未とありと
 次ハ其心寵遇かく其學の修行出未とありと
 り故良沢の雷同て從事の少らきりハ此業
 扱浮華なる一日の如く其業を遂げてもあると
 の生速なる如く其業を遂げてもあると
 先其生涯の如く其業を遂げてもあると
 へ其中の如く其業を遂げてもあると
 思ハるの時より遭ひ此の事又中川淳庵ハ兼て
 開くるとの如く其業を遂げてもあると
 物産の學を好める故何とぞ此業を勤め海外物産
 をも知り明らかめとき事を欲せり亦傍ら奇器巧技
 工夫を凝して新製せるも少らす〇和蘭局方を
 工夫を凝して新製せるも少らす〇和蘭局方を
 千古の桂川君ハさして天明年の初年膈症を患て
 〇四

見へねども前よりいへる家柄なれば只何となく
 此事を去のニ給ひ給ハ若く氣根ハ強く會毎に來
 り給ひし此舉にかり給へり翁ハ去れらとハ大に
 違ひ始て觀職ハ和蘭國に徴して千古の差あるに
 驚きいらとも先此一事を早くあきらめ治療の用
 を助けさく又世醫法術發明の間にも用立つやう
 なるべき志のとなりけれハ何とぞ一日も早く
 速に此一部見るべきものとなりなんど心掛け此
 一書の訣を其事成らハ望足りぬと心を決し思
 を興せよ依て深く彼諸言を覺へ他事を為すの

望ハなうりりなり五色の糸の乱れハ皆羨なるものなれども赤と黄なるは一色ハ決ハ餘ハ皆きり棄る心マて思ひ立ハなり其節思慮するマ應神帝の御時百濟の王仁初て漢字を傳ハ書籍を持渡りてより代々の天子學生を異朝へ遣ハされ彼書を學ハせ給ひ数千歳の今マ至りて始めて漢人マも耻さる漢學出来る程マなりとるなり今首めて唱へ出せるの業何として俄マ事整ふて成就すへきの道理をハ只人身形體の一事千載所説の違とる所を世マ示ハ何とぞ其大體を知らせとく

思ひハ速マて他マ望む所なくと一決ハ右マもいへる如く一日會ハて解セハ所を其夜宿マ歸りて直マ翻譯ハ記ハとめ置とるなり同社の人々翁ハ性急なるを時々笑ハハ翁答ハけるハ凡ハ丈夫ハ草木と共マ朽ヘきものならずとくハ身健リ且齡ハ若ハ翁ハ多病マて歳も長けたり往々此道大成のときマハ迎も逢ハハとかるハハ人の生死ハ預め定めクとハ始て發するものハ人を制ハ後れて發するものハ人マ制せらるといへり此故マ翁ハ急き申すなり諸君大成の日ハ翁ハ地下の人

となりて草葉の蔭に居て見侍るへいこ答けれハ
 桂川君などハ大に笑ひ後々ハ翁を譯名して草葉
 の蔭と呼び給へり斯るまことよて年月ハ過行き白
 駒の隙過るよりも早くとかくせし間ハ三四年の
 月日を重ね逐々世の人々聞傳へて尋未るもあり
 いかへ西洋所説の臟腑経絡骨節等其既ハ知る所
 を以て大凡ハ其真面目を語り示せる不こふハな
 りたり

一解體新書未之上木の前なりし頃奥州一閑の醫官
 建部清庵由といへる人たるは翁の名を聞傳へ

て平生記し置たる疑問を送りし事あり其書日記
 せし事とも我業に就きてハ感嘆する事多く去れ
 まで相識れる人ともあらず翁の志を同らするも
 千里一契なり其書といふ去れよての阿蘭陀流外
 科片假名書の傳書を此術の基とするはてなるハ
 扱々残念なり世に有識の人出ては昔ハ漢土よて
 佛經を翻譯せしとくハ阿蘭陀の書をも和解な
 すとらハ正其の阿蘭陀醫流成就すへいこ記せら
 れたり去れハ其時より二十餘年前よりの懸念と
 き去へたり実ハ其見解感するも餘ありまからず

も翁其人よりありて抑躍し吾等の知己千載の
 一奇遇なりと答書を報し夫より往復絶すして書
 信を通し其縁よりて品々の事もあり門人等其
 書通を書きあつめ蘭學問答と名け留たり

後子守等藏版となしぬ和蘭醫
 事問答と題せしものハこれなり

一翁ハ元来疎漫として不學なる也へ可成りし蘭説
 を翻譯して人も人のむやく理會し曉解するの益あ
 るやうとなすへきカハなす去れども人は託して
 ハ我本意も通じたりとくやむ去となく拙陋を顧す
 して自ら書綴れり其中は精密の微義もあるへ

と思へる所も解しつゝとき所ハ疎漏なりと知りな
 りらも強て解せず惟意の達しとる所たりを舉
 置けるのこなり譬へハ京へ上らんと思ふは東
 海東山二道ある事を知り西へくへ行けハ終るハ
 京へ上り着くといふ所を第一とすへくは其道筋
 を教するまでなりと思ふ所より其荒増の大方を
 りを唱へ出せしなり去れを手初しして世醫の為
 して翻譯の業を首唱せしなり素より浮屠氏翻譯の
 法ハ辨へず殊小和蘭書翻譯といふ事ハ古今小な
 き所の最初なれハ此讀之初の時小あり細密な

る或ハ固より辨すへき様もなす只幾重にも醫と
 るものゝ先第一ニ臟腑内景諸器の本然官能を知
 らすてハ濟す何をも各其实を辨へく互ニ治療
 の助ふなさをやと思へるゝ本意をかりなり此志
 由へ此譯をいそぎて早く其大筋を人の耳にも留
 り解し易くなくして人々是まて心を得し醫道は比
 較し速し曉り得せしめんとするを第一とせり夫
 故なるとけ漢人称する所の舊名を用ひて譯しあ
 けとく思ひしなれども此は名るものゝ彼は呼ぶ
 ものゝハ相違のもの多けれハ一定しうとく當惑

せり彼是考へ合すれハ逆も我より古をなす去こ
 ざれハいつれなくとも人々の曉し易きを目當と
 して定る方と決定して或ハ翻譯し或ハ對譯し或
 ハ直譯義譯とさまよく工夫し彼は換へ此は改め
 晝夜自ら打拭り右ともいへる如く草稿ハ十一度
 年ハ四年は満ちて漸く其業を遂げたり尤其頃ハ
 彼國俗の精察微妙の所ハ明了すへき事ハあら
 す今の如く思ひよらす開けし或より見る人ハさ
 そ誤解のこゝにいふへし首めて唱る時はあとりて
 ハなかり後の識りを恐るゝやうなる様とさるる

志をより其根元たる西肥の通詞筆の
 一約圖既に成り本篇も出版も成りしるも前條
 といへる去とく紅毛談さへ絶版となりし程の事
 なれハ西洋の事ハ假初も唱ふる事ハならぬ事
 とも併し和蘭ハ其中よても各別なるよや否の所
 不明よて屹度去れハ苦くらすといふ事も決
 しくとく若し私よ去れを公よせハ萬一禁令を
 犯せしと罪を蒙るへきも知られず此一事既に甚
 恐怖せし所なり然れとも横文字を其よよ出せ
 るよハあらず且讀て見れハ其姿ハ知る去となり

我醫道發明の爲なれハ敢て苦くらすと自ら決
 定し何れよも翻譯といふ事を公よする初を唱ふ
 へしと竊よ覺悟を極めて決断せし事なり但是
 ハ其事の最初なれハ何よを此一部恐れ多くも眞
 加のよめ公儀へ獻し奉りよき志願なりしる
 幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君ハ前よいへる
 如くの舊友なりけれハ此法眼よ謀りしよ其取扱
 推舉よより御奥より内獻し奉りぬ斯く障もなく
 事清しハ難有御事なりき又翁ハ從身吉村辰碩ハ
 京都よ住居せり此入の推舉を以て時の関白九條

家並に近衛准后同前公及び廣橋家へも一部づゝ
 奉りぬ 大れより 賜りて三家より目出度古歌を自ら
 の詩を賦し 九時 の大小御老中方へも同く一部
 つゝ進呈し 何方 とも何の障れる事もなく
 相済みぬ去れらるゝ大に此舉に於る安堵を
 なし より き去れ和蘭翻譯書公けになりぬるを
 めなり

一翁は初一念し ハ 此學今時の去る盛なり斯く
 開くへ ハ 曾て思ひよらさるゝなり是れ我亦
 たり先見の識乏しき也へなるへ ハ 今に於て去

れを顧み ハ 漢學ハ章を飾れる文也へ其開け遅く
 蘭學ハ実事を辞書に其まに記せし者由へ取り受
 け ハ 早く開け早かり ハ 欵又實ハ漢學又て人の智
 見開け ハ 後に出さる事也へかく速くなり ハ 知
 るへ ハ らす然れ ハ も斯業の自然に開くへきの氣
 運 ハ や此去るより前 ハ 記せる東奥の建部氏翁 ハ
 ま ハ 二十歳 ハ たり長 ハ なる翁 ハ なる ハ 不思議 ハ 書讀
 の往復あり ハ 我答書を得て實 ハ 狂喜帝 ハ ならず
 申越せ ハ 振なれ ハ 身 ハ の老朽 ハ 如何せん ハ して
 其息亮策 ハ 我門 ハ 入れ續 ハ びて其門 ハ 大槻玄澤 ハ

いふ男をさし登せて我門に入れし此男の天性
 を見るに凡そ物を學ぶ事實地を踏されハなす大
 となく心も徹底せざる事ハ筆舌の上せす一軀豪
 氣ハ薄けれともすへて浮たる事を好す和蘭の究
 理學もハ生れ得たる才ある人なり翁其人の才を
 を愛し務めて誘導し後ハ直に良澤翁に託して
 此業を學せしと果して勉勵怠らす良澤も亦其人
 を知りて骨法を傳へし程なく彼書を解する
 事の大概を曉れり其際同僚淳庵桂川法眼又福智
 山侯杯と往來して此業を講究せり又大に志を興

此上ハ西遊して長崎に至り直に彼通詞家に從
 ひ學ひ試ときしをとりて我も良澤も喜
 ひ許し汝壯年行矣勉めヨヤ其事を済まハ宿業益
 進むへしと慫慂せしより愈憤起して志を負笈
 を決しとり然れとも素より貪生の事なれハ力の
 及ざる事ともなり翁其志に感し専ら其力を助け
 んと思へとも翁も其去るハ生計を思ふ程な
 らねハ力の及へるにけハ去れを助け且御同學と
 りし福知山侯も淺らぬ恩遇ありてやうて彼地
 といとり本木榮之進といへる通詞家に寄宿し教

を受け又彼に問ひ此に謀り油断なく修行して帰
 府より尔後江戸永住の人となる事を得たり
 叔嘗て編集し置く蘭学楷掇といふ書ありしを
 帰府の後藏板して同志に示せり此書出後世の
 志あるものおれを見て新に憤懣し志を興せし
 亦少くらす此人を生し此等の書の出る事となり
 しも翁の本志を天の助け給ふの一にやと思ひし
 事なり

一此餘我門に出入せしもの内斯業を學ひ掛りし
 もの多かりけれとも或は久しく都下は足をこし

むるまごかしく或は官途に羈れ或は生計に逐れ
 或は病身或は天死杯に皆まろくし事を遂けし
 もなかりき然れとも翁の去れを發起せしより
 其支派分流を生し出せし少くらす叔安永七八
 年の頃長崎より荒井庄十郎といへる男平賀源内
 々許に來れり去れハ西善三郎の養子として
 政九郎といひて通詞の業を為せし人なり社中蘭
 學を興すの最初なれハ翁の宅へ招き淳庵なごし
 共ニ「サーメン」スブラ「カ」を習ひし事もありし源
 内死せし後桂川家に守食し其業を助け又福智山

一 戻へも出入りて戻の地理学の業も加功たり
 戻専ら地理学を好み給ひ 庄十郎後ハ他家に在り
 泰西國説等の訳編あり 此人江戸へ下りて聊
 て森平右衛門に改名したり 今ハ千古
 社中を誘費せさりし人もあらざらん 今ハ千古
 の人となれり

一 津山戻の藩醫に宇田川玄随といへる男あり去れ
 ハ元来漢学を厚く博覧強記の人なり此業に志を
 興し玄澤よりて彼國書を習ひ其紹介して翁に
 淳庵へも往來し桂川君良澤へも漸く交を通し
 り 後ハ長崎前の通詞家白川戻の家臣となり石
 井恒右衛門といふ人杯へも出入り彼の言語の

數々を習ひし元来秀大にて鉄根の人也ハ其
 業大に進み一書を訳し内科概要と題せるハ卷
 を著せり是れ簡約の書といへども本邦内科書新
 訳の始なり惜しむるは四十餘年一して泉路に趣け
 り此書説後といふ漸
 一 京都に小石元俊といへる醫師あり獨嘯庵の門人
 にて醫事志至て厚き男なり翁因より相識れる
 人よあらず彼れ始て解體新書を讀みて千古の説
 二 差ひし所を疑ひ親數秘賦して斯書の著実なる
 二 感し爾来深く去れを喜ひ翁へ書信を通し猶
 其解しつとき所を尋問せり天明五年の秋翁戻家
 二 陪して其國に罷りし歸路上京せし時滞留の間

日夜来て問難しとり其後ハ東遊し玄澤ハ僑居を
 主とし在留一年し近く毎々社中ニ此業を討論せ
 り蘭學とてハ為されども帰京の後其塾ニ於て出
 入の諸生徒ハ解體新書を毎講して其実法を人
 々示せしと云れ關西の人を誘致せしの一なり
 一大坂ハ橋本宗吉といふ男あり傘屋の紋々ノ事を
 業として老親を養ひ世を営めりと不學なれと生
 来奇弋あるもの由へ土地の豪商とも見立て力を
 加へ江戸へ下して玄澤ハ門ニ入れとり僅の逗留
 の間出精し其大躰を學ひ帰坂の後も自ら勉めて

其業大ニ進ニ後ハ醫師となりて益此業を唱へ從
 遊の人も多く漸く譯書をも為く五畿七道山陽南
 海諸道の人を誘導し今ニ於けるいよく感なりと
 聞けり江戸へ来りしハ寛政の初年の事なり帰阪
 の最初右の元俊も彼々志を助けて其業を勵まし
 めしとなり
 一土浦侯の藩士ハ山村弋助といふ一奇士あり其叔
 父市川小左衛門を介して翁ハ蘭學の事を問ふ
 翁其ころハ年老て此業を以て悉く門人玄澤ニ託
 しされハ玄澤彼國文二十五字よりして教立たり

天性其戈備り殊ニ地學をよのミ専ら其筋を專精
 セーダ白石先生の采覽異言を増訳重訂して十三
 卷の書を譯撰す栗山先生の推挙よりりて官へも
 内猷せり其餘翻譯の内旨も奉りたりり其業も
 全うらすいて即世せり惜むへいと云ふへり萬國
 輿地の諸説ハ未と漢人の知らざる所のもの多し
 是れ蘭學の去るに至れるの功なり

一石井恒右衛門ハ長崎舊の訳官馬田清吉といふも
 のなりり其家業を他人へ遜りて江戸へ來り天
 明の中頃白川侯の家臣となれり侯其初めを知り

「ト、ニユース」本草を和訳せしめ十数卷の譯説成
 れり其業を卒へて是亦異客となれり稲村某
 といふ男取立「ハルマ」釋辞の書ハ全し此人の力
 又頼れり此譯書ハ近來初學稽古の人々考闕の益
 ありといふ此人も舊職業を以て仕官せへり
 て東下せりハあらねども斯の如く隆盛の中へ
 來りし事ゆへ専ら此道の助けとなりたり
 一桂川家の事ハ前にもいへる去りたり甫周君ハ
 校群の俊きゆへ元々和蘭の事にも略通し其名聲
 四方に走せ尤常ニ其業事の起ハ公上にも知し

召れし事なれハ時々西洋筋の事ハ和鮮御用も命
せられし趣なり其草稿其家ニハ有へし和蘭薬撰
海上備要方杯云ふ譯説の著書ありし聞きも未だ
成熟の書を見し年いまだ六十ニ満まると千古の
人となり給へり

一因州侯の醫師稻村三伯といふ男あり其國ニ在り
て蘭学楷榊を見て憤發して江戸へ下り玄澤門
を扣き此業を學び後ニ彼「バル」バといふ人著せる
言辞の書を石井恒右衛門ニ依りて譯を受け十三
卷といふ和語解訳の書を編せり其始め石井一介

をなし原書も借し與へとりて其初稿ハ宇田川玄
随岡田甫説といふもの加功して時々石井が許し
往来して成就せりと訂正の時ニ至りてハ他ニ力
を添へしものもありとも関けり後故ありて彦邸
を退き江州海上郡の邊ニ浪遊し遂ニ名を随鳴と
改め京師ニ在りて専ら此業を唱へし由令ハたれ
も古人となれりと聞けり併し釋辞の書を企て成
せしハ初學者の爲し一功といふへし

一今の宇田川玄真初ハ安岡氏にて伊勢の人なり江
戸へ出でし岡田氏を冒し上といふ宇田川玄隨の

漢學の弟子なりし由玄隨其才の固密なるを知りて蘭學を引導せんとの意ありて毎く玄澤へも導せしことありしとなり然るは玄隨一とせ炭駕を陪して其國に至りしとるは養家を辞し本姓安岡を復せし時玄真初て師命を命て玄澤を許し未り此學を習ふ事を請ふ蘭字の書方までハ玄隨より習ひ受けしと見へされハ為し蘭言譯語の一小冊を授けて寫ししめ又彼の局方の書を讀しむ日と往來し且、寄食の事を乞ひけれども其ころ家を支れる事ありて暫く同社嶺春泰が許し託せ此頃

春泰疾んで日々篤し終り物故せり故に此後玄澤甫周君へ謀りて同所へ託して曰く此男蘭學執心よし其依る所なきを憂ふ為しおれを取扱ひ給とらハ往々君の業を助くべきものなるを説く君直し諾しておれより同家に入塾せしとるなりぬ其際も玄澤がもと一往來して譯法を問ふ事志をくたり本此男蘭説の實際に心酔していふ吾他は望む所なし隨意に此業の修行出来るの師塾ならハ何方へも寄宿なりしときといふ宿願なりそれゆへ桂川家へ託せしことなり然るは其ころ

同家ハ官務と治業と繁多よりて彼々素志を達するに能ハざるを玄澤は訴る去と繁くなり一日玄澤翁は此事を語る翁其去るハ次第は専門の療術寸暇なく素業を勤むへき暇とてハなき身となりたり然れども翁ハ素より此道は志深かりけれハ猶益其道を開とさきの志止々とく解終新書成就の後も彼「イヌテ」外科書の訳文は手をかけ金瘡瘡瘍の諸篇ハ草を起して數卷の稿ハ出来たりく其頃度この病は羅りて傍人も諫め去れハ此業勤勉の崇りをなす所存れハ少間廢すべし

いひ尤玄澤等もひとすら心志を放散し偏し老を養ふべし不肖といへども其業吾去れし代るべしともいひ且ハ次第は老行く年なれハ中々大業遂べき氣根もなく其後ハ今中絶しとりけれとも其本志の己ミケとく數年の間見あとり一蘭書の分ハ大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭す購ひ求め相應は蔵書も集りたり此學を事とせんとするもの誰とあれ其志ハありても書籍と乏しき時ハ事成らむと思ひ自ら讀は暇あるすとも往く子弟等ハもとより志ある人し借共へ

て此道開くるとめの裨益とるべしと思ひ数十巻
 を藏しとり扱同く八年若く此道又志篤き人を
 見出し別一女と妻し養子とす此業を遂せ
 我醫道の未と開ざして未と足らざる所を開きて
 之を補綴し諸民の疾苦を廣濟なるときもの朝
 暮心よりけし折なれば幸又玄真ある去とを喜ひ
 即ち去れを招き其志を問し又其云ふ迎女澤が申
 せし違はすよりて翁が家へ迎へ父子の契を結
 ひとり玄真も其意を得て深く喜ひ我家の藏書を
 自在に取扱ひ日夜怠らぬ學の黽勉一うとならす

やもすれハ夜を徹する事もあり其精力の斯
 りしゆへ進むる事も又速よして其功昔日は倍せ
 り翁の喜ひも亦知るべし志ありけれとも其頃
 ハ年弱き時なれハ彼は専ら出精すれとも亦氣
 の移りやすき容氣盛の冢中なれば身持至て放蕩
 となり志を異見をも加へたれとも愈募りて已
 ざるより惜むべきの戈子とハ知りたれとも捨
 置ハ如何なる事をや仕出し侯家の御名を汚すべ
 き事もあるべし老の身其心一日も易ららず
 己むことを得ず離縁して長く交を絶たり

一 去れよりて同社も交を通せず彼も頼み少き身
 となりて甚と窮厄してありし去らるる其好む
 所の業ハ廢せさりしを彼稻村なる者採ひそり
 見次せしよりなり其際稻村等我男伯玄内謀
 りて藏書中内科一二部の書を傭して譯せしめな
 んどして其窮を凌せしといふこと後聞たり遂
 二ハ自新して志を改めたりと聞たり亦其頃稻村
 ヲ企し「ハル」釋辞の書ハ彼ヲ加功して其業を助
 成せり
 一二三年過て後宇田川玄随病よりて物故せり其

嗣子なきを以て私く養子を求めたりあるは
 稻村氏仲立して宇田川の家を継せたり前より
 る如く玄随へハ去らるる縁もあり其なりり
 後といへとも令亡父となり一人の志を継き其身
 も志す所の本意を達せりといふへし尔後益々專精
 して数多の譯説をり為し醫範提綱といふものを
 開板し既一家の事成りぬ其行ひ改り其志立ち
 上よりて宇田川姓も継し事なれハ再ハ翁へも交
 通をゆるし給れと伯玄玄澤等々申よりせ然る
 上ハ長く惡之速くへきよハあらそとして出入を許

一故の如く相親之玄真翁は仕ること師父の如く
なれハ翁も亦彼を見る者と子の如く是るの昔も
復せり

一玄澤ハ先き其名夙く成りて近頃官府よりして
新に御藏和蘭の書翻譯の命を蒙りしに至り
ぬ昔翁の輩の假初の企し學業なりし今翁の世
もありて顕らるるかざる 嚴命を蒙り奉りしハ
冥加ももありしとく翁の宿世の願満足せりとい
ふへし何卒生民廣濟の爲しと思ひ立ちて取付き
らととき此事は刻苦せし創業の功終に空しうらす

續ひて玄真も亦同様の命を蒙り相俱は此は從
事せる支となれり仰みて感戴するは堪へざる歟
なり尤も去れ他にもあらむ翁の誘導せし我門の徒
等よりして此盛舉にあつたれる老る身の本懐亦何
をう去れし加ん翁の高龄を錫りし天録もありし
とく當時艸葉の蔭と譯名せられし我身今もなを
聖代になららへて其全備を見せしめ給ふとと限
りなきの恩光昊天の冥感と云あらん
一此餘玄澤玄随玄真の門より出し青藍の畧もある
よしなれとも翁の子の子の孫彦よりして委し知

る所はあらず三都の間諸侯の國々分處するも
 多かるへ
 一昔長崎より西善三郎ハ「マリーリン」の釋辞書を全部
 翻譯せんと企しと聞けり手初迄して事成らすと
 聞けり明和安永の頃はや本木榮之進といふ人一
 二の天文曆説の譯書有りとあり其餘ハ聞かざる
 此人の弟子は志築忠次郎といへる一譯士ありき
 性多病よりして早く其職を辞し他へ遷り本姓中野
 とい復して退隱し病を以て世人の交通を謝し獨學
 んて専ら蘭書に耽り群籍を目をきらし其中彼文

科の書を講明しとりとなり文化の初年吉雄六次
 郎馬場干之助といふもの其門に入りて彼属文
 並に文章法格等の要を傳へしとなり此干之助ハ
 今ハ佐十郎と改名し先年臨時の御用にて江戸に
 召寄せられし數年在留し當時御家人より召出され
 永住の人となり専ら蘭書和解の御用を勤め此學
 を好めるもの皆其讀法を傳ふる事となり我子
 弟孫子其教を受ふことなれハ各々其真法を得て
 正譯も成就すへし叔忠次郎ハ本邦和蘭通詞と
 いへる名ありてより前後の一人なるへしとなり

若し此人退隱せしめて職にあらは却てらくまて
 一ハ至らざるへきは是れ或ハ江戸よて我社の師
 友もなきくして推て彼邦書を讀出せる事の始り
 一彼人も憤發せるの為す所歟とも思はる是亦昇
 平日久しく去れらの事も世に開へきの氣運とい
 ふへ

一滴の油を廣き池水の内に點すれハ散りて
 満池に及ふとやさある如く其初前野良澤中川
 淳菴翁と三人申合せ假初と思ひ付し事五十年よ
 近き年月を経て此學海内よ及ひ其所彼所と四方

一 流布し年毎に譯説の書も出るやうに聞けり去
 れハ一犬実を吠れハ萬犬虚を吠るの類よて其中
 一ハよきもあしきもあるへけれともそれハ姑く
 申よ及すらくも長命すれハ今の如くよ開る事を
 聞たりと一とハ喜ひ一とハ驚きぬ今此業を
 主張する人は是よての事を種々の聞傳へ語り傳へ
 を誤り唱ふるも多しと見ゆれハ跡先なるら覺居
 たり一昔語をらくハ書捨ぬ
 一 ちへすくも翁ハ殊よ喜ふ此道開けをハ千百年の
 後々の醫家真術を得て生民救済の洪益あるべし

と手足舞踏雀躍ノ堪へざる所なり翁幸ニ天壽を
 長シて此學の開けらるり初より自ら知りて今
 の斯く隆盛ニ至りしを見るハ去れ我身ニ備りし
 幸なりとのいふへらす伏して考ふニ其実ハ
 恭く太平の餘化より出シ所なり世ニ篤好厚志の
 人ありともなんぞ戦亂干戈の間ニして去れを創
 建シ此盛舉ニ及ぶの暇あらんや恐多くも今茲文
 化十二年乙亥ハふとらの山の おんこころ大御神二百ニ世
 の御神忌ニあらせ給ふ此 おんこころ大御神の天下太
 平ニ一終シ給ひし御恩澤数ならぬ翁ノ筆ニて加

り被り奉りくまニすニくニまニて 神徳の日の光照
 りそへ給ひし御徳をりとおそれニこニ仰ニま
 ても猶あまニりある御事なり其卯月去れを手録シ
 て玄澤大槻氏へ贈りぬ翁次第ニ老疲れぬれハ此
 後ニるる長事記すへシとも覺すニと世ニ在るの
 絶筆なりと知りて書つニけニなり跡先ニなる事
 ハよきニ訂正シ繕寫シなハ我孫子等ニも見せよ
 ろシ八十三齡九幸翁漫書す

蘭學事始卷二終

蘭亭序

〇二十六

王羲之

晴
保
民
日
觀
書

